イノッチのシェアリングネイチャー　ＮＯ**152-61**　　2021.2.21

〈富士山という山〉

富士山が見える山に登った。愛鷹山系の、蓬莱山、呼子岳、越前岳の週回コースだ。コースタイムは5時間半。途中、“大杉”があり、挨拶した。幹回りは優に３メートルは超える巨木だ。幹に耳を当て静かに木の鼓動を聞いてみる。耳の奥の奥の方で何かささやくような音が聞こえる。葉擦れかもしれないし小鳥が枝をつついている音かもしれない。優しい音で、しばし聞き入ってしまう。恐らく100年単位で生きてきた大杉、ハグしてパワーをもらった。

〈呼子岳から撮った富士山と越前岳〉

〈昭和13年発行の五十銭紙幣はここ富士見台か撮影したものとの案内板があった〉

若い頃、富士山という山は好きになれなかった。あまりにも整いすぎて非の打ち所がなく、美の象徴のような存在。花にも海にも湖沼にも、田んぼや畑や遊園地、電車や高速道路、学校。どの風景の中にあっても似合ってしまう富士山。切手にもお札にも記念硬貨にもなり、みんなから、“富士山、富士山”と愛されている山。へそ曲がりなのか、単なる美しいものに対する嫉妬心からなのか、はたまた、美に照射される自分自身に耐えられなかったのか、とにかく富士山という山は好きにはなれなかった。若い頃は。でも、いつの頃からか、あの裾野を広げ雄大にデンと構える整った富士山の美しさを、そのまま“ああ、きれいだな～”と素直に受け入れられるようになった。長生きはしてみるもんだ。